

烏弋山離とアレクサンドリア (1)

—漢語上古音へのアプローチ—

吉池孝一 中村雅之

上古音とは何か？

吉池：漢語音韻史を大雑把に上古音・中古音・近世音などと分類しますが、その中でも上古音は取っ付きにくいですね。

中村：そうですね。中古音や近世音は具体的な体系をイメージしやすいのに、上古音は漠然としています。

吉池：どこに原因があるのでしょうか。

中村：二つ考えられます。第一は資料の制約です。中古音は韻書や韻図、それに日本・朝鮮・ベトナムの漢字音など資料が豊富ですが、上古音は『詩経』の押韻と諧声符が中心ではなはだ資料に乏しい。第二は方法論の曖昧さです。『詩経』が時代や地域の定まらない雑多な詩の集まりであるという点に加えて、諧声符というこれまた時代の不特定な資料を加えたことで、本当に周代の音韻体系を求めることになるのかが曖昧です。

吉池：方法論が曖昧だということですが、仮に中古音を『切韻』(601年)の音、近世音を『中原音韻』(1324年)の音とした場合、最初から体系があります。それに比べて、上古音については、『詩経』の押韻と諧声符によって音の枠組み(体系)を設定するという手続きが一つ増えます。設定された上古音の枠組みそのものが不安だ、本当に周代の音韻体系を求めることになるのか、ということですね。

中村：カールグレンの中古音研究が成功した主たる要因は、『切韻』(601年)の基礎方言を唐代長安音と規定し、それを現代諸方言の祖語と見立てて比較言語学の方法を用いるという方法論の明快さでした。『切韻』を唐代長安音とする点については後に反論もありましたが、方法論的に重大な異議は出ませんでした。そのためカールグレン説の修正という形で中古音研究は順調に発展したと言えます。しかし、上古音では韻書のような形で枠組みが与えられてはいませんから、『詩経』の分析によって枠組みを作るところからスタートするのですが、『詩経』の押韻が一つの体系でくれるのかどうかという点にも不安があります。

吉池：『詩経』と諧声符によって設定された清朝以来の上古音の枠組みが不安だということ

についてはカールグレン氏も述べているようです¹。それに対して有坂秀世氏は、詩三百篇のうち周代の陝西地方の音韻を反映する秦風・豳風・大雅・小雅及び周頌が大半を占めるため、周代の陝西地方の音韻状態に近いものを得ることができると述べています²。もしも上古音の枠組みに対してそれほど異論が出ないのでしたら、中古音から『詩経』(ほぼ西周時代、陝西付近の文化人の言語)に遡って合理的な音を設定する、ということで良いのではないのでしょうか。

中村：ただ、そのような「合理的な音」がどれほど説得力をもつかが問題になります。例えば、中古音で [-i] 韻尾をもつ「害」は『詩経』では「達」や「發」と押韻しています。「達」「發」は中古で [-t] 韻尾ですね。そればかりでなく、諧声系列でも、「害」は「割」「轄」など中古で [-t] 韻尾の字の声符になっています。それでカールグレンは上古音として「害」に [-d] 韻尾を設定するのが合理的だと考えました。[-d] は [-t] と音が似ているから押韻したり諧声系列をなしたりすることができ、のちに中古の [-i] へと変化したという説明です。この [-d] は記号として便利なので私も時に利用しますが、実在した音声としての実感を持てるかという疑問ではないのでしょうか。

1 有坂秀世『上代音韻攷』(三省堂, 1955年出版)には「明末から現代に至るまで多くの支那人學者によつて努力され來つた周代の詩賦に於ける押韻状態の研究につき、カールグレン氏は次のやうに批評してゐる。「過去數世紀の間支那の學者が古音闡明の鍵として非常な期待を懸けつゝある古代詩賦の押韻例の價値に對しては、私は大いに疑はざるを得ない。古韻の研究に際して最も主要な材料になつてゐる詩經の内容は、當時の支那に存在したいろゝゝな小さな國々から集められたものが大部分を占めてゐる故、その中にはいろゝゝな方言が含まれてゐるわけであり、従つてそれらをすべて一樣に扱ふわけには行かない。又當時の詩人が押韻に關してどれ程正確であつたかは疑問である。詩經の中の非常に大きな部分を占めてゐるものは單純な民謠であるが、スカンディナヴィアやイギリスなどの民謠について吾人の知る所では、時としてはほんの僅かな類似點しか持たない音までが同韻として押用されてゐる場合がある。例へば、スウェーデンの民謠では、in と kring と相韻し、viter と liker と相韻してゐるやうな例さへある。又イギリスの民謠でも、dyke と knight と相韻し、kin と him と相韻し、man と won と相韻する類が見られる。併しその他の方法から得られた結果を支持する補助資料としては、分韻状態も亦將來確かに若干の重要さを持つやうになるであらうと思ふ。」(Philology and Ancient China 113—114頁大意)」(298頁)とある。

2 有坂秀世『上代音韻攷』(三省堂, 1955年出版)には「但し、從來諸家によつて研究された諸分部は、結果から見れば、大體周代の陝西地方の音韻状態に近いものを反映してゐることになりはしないかと思ふ。何故なら詩三百篇の中、大體に於て陝西地方の言語で作られたものと思はれる秦風・豳風・大雅・小雅及び周頌(武田瀨氏著「支那文獻の解題とその研究法」三六三—三六五頁に譯出してある梁啓超氏の説の如くならば、周南・召南もこの中へ入れてよい筈と思ふけれども、今假に除いておく)のみで既に一五九篇を占めて居り、その他の諸篇(十三國風及び商頌・魯頌)はすべて合せても一五二篇に過ぎない。」「從來東洋の學者のやつて來たやうな方法で分部を立てる時、出来るだけ細かく分けるならば、恐らく周代に於ける陝西地方の音韻状態に最も近いものが出来ることと思ふ。併しそれにしても、理想的の研究法としては、まづ純粹に陝西地方から出た材料をのみ選んで、その範圍内で分韻状態を出来るだけ詳しく研究し、然る後にその結果を他の地方から出た材料と比較してその間の異同を調べて行くに越したことは無い。」(299頁)

吉池：王力氏のように、韻尾の [-d] [-g] や二重声母 [pl-] [kl-] など、現在の漢語方言の中に確認できない音は上古音においても用いないという立場もありますね³。

中村：そのような立場があってもいいと思います。ただし、韻尾や声母の種類を増やさなければ、当然介音や主母音の種類が増えることになりますから、どちらを選ぶかという問題になります。王力氏の立場に近い何九盈氏は、この二重声母について、諧声符の研究からの必然の帰結だとしても、それは上古音よりもずっと前の段階のものであると考えているようです⁴。

吉池：王力氏は諧声符により二重声母を想定することには反対であり、何九盈氏は諧声符により二重声母を想定することに賛成であるが上古音よりもずっと前の段階のものとするわけですね。『詩経』の音としては二重声母を認めないところは同じですが、両者は微妙に異なっています。

中村：王力氏が二重声母と漢語との関係についてどのように考えていたかよくわかりませんが、想像をたくましくすれば、二重声母を持っていた時期があったとしても、そのような段階は‘漢語研究の範囲’ではないと考えていたかも知れませんね。例えば、“仮に”タイ系の言語が漢語の母体であったとして、その段階では二重声母を持っていたが、他の言語の要素を取り入れて漢語が成立した時にはすでに二重声母はなかった。上古音研究はあくまでも漢語の研究であるから、漢語以前の段階は考慮しない。王力氏や何九盈氏の考え

³ 王力(1985)『漢語語音史』(北京：中国社会科学出版社)。

韻尾 [-d] [-g] については「大家知道，漢語入聲字的塞音韻尾都是一種唯閉音（只有成阻，沒有除阻），叫做“不爆破”，唯閉音要聽出清濁兩種塞音來是困難的，它不像英語的塞音収尾一般是爆破音，清濁可以分辨出來。因此，高氏的-g, -k 分立也是一種虛構。」(47 頁)とある。漢語方言の -p, -t, -k は内破音であり、内破音で無声の -p, -t, -k と有声の -b, -d, -g を区別するのは困難。また漢語方言にそのような区別を持つものはないので上古音においても認めないという立場。

二重声母については「上古漢語有沒有複輔音？這是尚未解決的問題。從諧聲系統看，似乎有複輔音，但是，現代漢語爲什麼沒有複輔音的痕跡。」(23 頁)及び「高本漢擬測的複輔音聲母，有下列十九種：……等，不勝枚舉。上古的聲母系統，能這樣雜亂無章嗎？所以我不能接受高本漢上古複輔音的擬測。」(24-25 頁)とある。諧声符は、上古音の韻母の再構成には有効であるが、声母に持ち込むことには懐疑的。また漢語方言にも二重声母の痕跡はないので上古音においても認めないという立場。

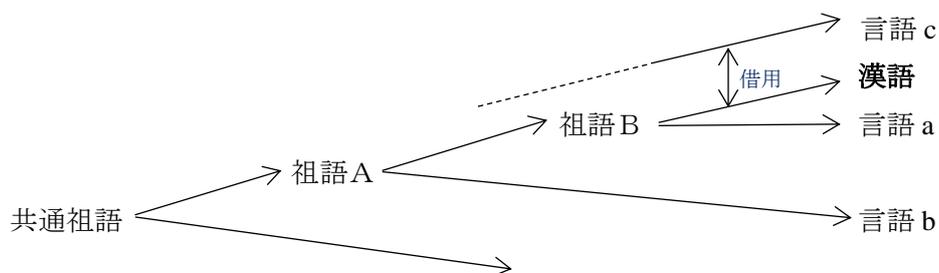
⁴ 何九盈(1991)『上古音』(北京：商務印書館)。「我个人認爲：根據諧聲資料，遠古漢語有可能存在複輔音，但在《詩経》時代，複輔音恐怕已經消失了。拿少数民族的現代語言材料來證明《詩経》時代有複輔音，從時間來看未免太遙遠了。彝語、苗語、壯語，雖然都屬漢藏語系，但是它們跟《詩経》時代的漢語究竟多大的關係呢，在這方面還缺乏足够的證據。」(82 頁)。

はそのようなものではなかったでしょうか。これは全くの想像にすぎませんが。

吉池：つまり、上古音研究の土俵はあくまでも漢語であって、それ以外の要素は扱わないということですね。韻尾の [-d] [-g] や二重声母 [pl-] [kl-] を認めるカールグレンは王力氏のような立場からすれば、漢語の土俵から一步はみ出ているように見えたかも知れせん。ところで、最近ではカールグレンとは全く異なる再構音をよく見かけます。もちろん、王力氏からもかけ離れています。

中村：いわゆる「新派」に属する研究ですね。実は私もあまり詳しくはないのですが、概略的にはシナ・チベット語族の祖語を設定して、そこから中古音までの中間点に上古音を置くというやり方でしょう。この立場をとると、チベット語やビルマ語、タイ語などもある意味で上古音の資料ということになります。シナ・チベット語族の共通祖語の再構というものがどれほど進んでいるかは疑問ですが。

吉池：共通祖語ではなくて、祖語Bや祖語Aのようなものを想定して、個別の言語 a や b と比較し、その結果を利用して漢語上古音の枠組みに合理的な音価を与える、ということでもいいわけですね。



中村：構いません。いずれにしても、シナ・チベット語族というものを認めない人にとっては、同系言語を利用するという比較言語学的方法は不可能ということになります。一方、シナ・チベット語族を認める立場に立てば、一定の語彙については再構が可能かも知れません。

吉池：これは漢語とは何かという、漢語の定義の問題ですが、祖語Bや祖語Aに想定された言語を、漢語と呼んで良いのかということについては慎重である必要があるかも知れません。ところで、言語cのように、系統が明らかでない隣接した言語は、互いに借用を繰り返してよく似た特徴を持った言語となる場合があります。借用語であるからには、理窟の上では利用できることとなりますね。

中村：つまり、比較言語学的方法とは別に、漢語から言語cへの（あるいは言語cから漢

語への) 借用語を利用して古い時代の漢語を再構する試みですね。言語 c にチベット語やタイ語を設定すれば、それらを資料とすることも可能かも知れません。

吉池：借用が生じた時代の言語を定義の上で漢語と呼ぶことができるのかという問題は依然残りますが、現時点では問題提起にとどめざるを得ません。いずれにしても、そのようにして割り出した音価は高度に理論的なものということになります。中古音の研究は具体的な音価を提供する豊富な対音資料のおかげで成功したとも言えるのですが、上古音の研究も同様のアプローチはできないものでしょうか。

中村：上古音の晩期から中古音への過渡期には比較的豊富な対音資料があります。そのころの音訳漢字を幾つか取り上げて検討してみたら、いくぶん視界が開けるかもしれません。

吉池：最も早期の音訳としては『漢書』西域伝の「烏弋山離（うよくさんり）」がありますね。これは *Alexandros* が東方遠征の途上にあって建設し自らの名を冠した都市 *Alexandria* の音訳とする説が有力で、多くの研究者が取り上げています。

中村：『漢書』は後漢の成立ですが、西域伝の地名については恐らく前漢の張騫がもたらしたものが大半でしょうから、この「烏弋山離（うよくさんり）」もその一つと考えてよいかも知れません。いずれにしても、音訳がなされた下限は『漢書』の成立時（1世紀）ですから、晩期上古音を利用した音訳漢字ということに間違いはなさそうです。

吉池：「烏弋山離（うよくさんり）」については、*Alexandria* の音訳ではないとする見解が出たこともありますので、まずはその辺りの整理から始めたいと思います。

「烏弋山離」は何の音訳か

中村：李方桂氏の『上古音研究』（1982年）には *Alexandria* の音訳として紹介されていますが⁵、そもそも *Alexandria* 音訳説を最初に提示したのは誰なのでしょう。

吉池：岑仲勉氏の『岑仲勉著作集 漢書西域傳地理校釋』（2004年）に諸説が紹介されています⁶。それによると、烏弋山離を *Alexandria* の音訳としたのは、最初かどうかはわかりませんが、早くは *Chavannes, E. (1905)*⁷ のようです。それに異を唱えたものとして、白鳥庫吉

⁵ 「古代台語 *Tai Language* (Li, 1945, 340 頁) 用 *r- 來代替 jiəu 字的聲母，漢代用烏弋山離去譯 *Alexandria* 就是說用 弋 jiək 去譯第二音節 lek，因此可以推測喻母四等很近 r 或者 l。又因為他常跟舌尖塞音諧聲，所以也可以說很近 d-。」(13-14 頁)

⁶ もと 1981 年。

⁷ *Chavannes, E. (1905), Les pays d'occident d'après le Wei-liao, T'oung Pao 6, pp.519-571.*

(1917)⁸の説などがあります。Chavannes,E.(1905)ですが、その漢訳が『尚志學會叢書 史地叢考』(編譯：馮承鈞，上海：商務印書館，1935年。初版は1931年。臺灣華文電子書庫⁹)にあります。それによるとつぎのとおりです。

「按烏弋即前漢書烏弋山離之省稱。似爲亞歷山大 (Alexandrie) 之譯音，即希臘古地理學者 Strabon 之 Alexandreis e en Ariois，今之 Hérat 是也。」¹⁰ (102頁)

烏弋山離は地理学者 Strabon がいうアリオス地域にある Alexandria の音訳で、現在のアフガニスタン北西部のヘラートに当たると考えているようです。

中村：まず基本的な事柄から確認したいのですが、Strabon はたしか古代ローマ時代、紀元前後に生きたギリシア系の学者で地理書を出していましたね。

吉池：ええ。日本語訳で『地誌』または『地理誌』とされます。『ストラボンギリシア・ローマ世界地誌 II』(飯尾都人著，東京：龍溪書舎 1994) の解説によると、紀元前 64 年頃が著者 Strabon の生年のようです。訳にはつぎのようにあります。

「アリア地方は長さ約二、〇〇〇スタディオン (三六〇キロ)、平野部の幅三〇〇スタディオン (五四キロ)、市としてはアルタカエナ、アレクサンドレイア、アカイアがあり、何れも市の建設者たちの名を取っている。」(11 卷 10-1. 68 頁)

中村：先ほど、『尚志學會叢書 史地叢考』からの引用がありました。シャヴァンヌ論文の翻訳ですね。そこには Strabon が記したギリシア語をローマ字転写で載せていますが、転写にやや不正確な部分があるので、まずは Chavannes が示したギリシア語をローマ字転写しておきます。正確には、「Alexandreia he en Ariois」となります。

吉池：ギリシア語の解説をお願いしますか。

中村：最初の Alexandreia は問題の都市名ですね。次の「he」は定冠詞の女性単数主格です。Alexandreia にかかります。「en」が英語の「in」にあたる前置詞で、与格を要求します。最後の「Ariois」は「Arios」の複数与格です。「Arios」はヘラートを流れる川の名で、全体は「アリオス川沿いにあるアレクサンドレイア」ということでしょう。定冠詞が名詞の後に

⁸ 鳥庫吉(1917)「罽賓國考」『東洋學報』第七卷第一號。『白鳥庫吉全集 第六卷』295-359による。

⁹ <http://taiwanebook.ncl.edu.tw/en/book/NTUL-9900007155/reader> で見るができる

¹⁰ Chavannes,E.(1905)の原文は、以下の通り。“Wou-yi est une abréviation de Wou-yi-chan-li 烏弋山離(Ts'ien Han chou, xcv i, a, p. 6 r^o), nom qui paraît être la transcription d'Alexandrie; ce royaume pourrait donc être identifié avec l' Ἀλεξάνδρεια ἢ ἐν Ἀρίοις de Strabon, c.-à-d. avec Hérat.”(p.555)

あるのを不審に思うかも知れませんが、もしも「he Alexandria en Ariois」とすると、「アレクサンドレイアはアリオス川沿いにある」という風に「主語＋述語」と読まれてしまいます。前置詞句が名詞を修飾していることを示すためにギリシア語では修飾語の前に定冠詞を置く決まりになっています。「he en Ariois Alexandria」も可能です。

「アレクサンドレイア」という地名は、アリア地方以外にも出てきますか。

吉池：『地誌』に「アレクサンドレイア」として登場するのはアリア地方と、エジプトの二か所です。アリア地方の「アレクサンドレイア」は次の図の⇒を付したところにあたりとかがえられます。なお原図は『世界史B』（栗原純ほか3名著，三省堂，5版2003年）を借用しました。アレキサンドロスの侵攻経路と建設したアレクサンドリア（■）を示したものです。



中村：「アレクサンドレイア」はギリシア語に基づく表記、「アレクサンドリア」はラテン語に基づく表記です。語尾がわずかに違いますから、厳密を期すならば、ギリシア語形の Alexandria を用いる方が適切かと思えます。『漢書』西域伝の烏弋山離と Alexandria は、音の対応からみれば、烏弋と alek とは大きな開きがあり直接 Alexandria とは結びつきにくいのですが、山離と sandreia の対応により、Chavannes は両者の関係を直感したのでしょうか。インド西北に出てくる Alexandria はアリア地方の一ヶ所のみということですから、ここをもって『漢書』の烏弋山離にあてたのは自然に思えます。ところで白鳥庫吉(1917)の説はどのようなものでしょう。

吉池：白鳥庫吉(1917)「罽賓國考」は『白鳥庫吉全集 第六卷』（岩波書店，1970年。）に収められていますのでそれによります。関係箇所はやや長いのですが次のとおりです。

『漢書』の撰挑が愈々 Kabul なりとせば、其の南に位せる烏弋山離の Kandahar なるべきは明らかなり。但し Kabul の南方には古代 Arachosia 及び Drangiana の二國ありて、今日の Kandahar 及び Seistan に該當す。而して漢代の烏弋山離は單に Arachosia 一國に限られしか、

或は Drangiana をも包括せしか。このところ甚だ分明ならず。然し『漢書』の烏弋山離の條に「至烏弋山離南道極矣、轉北而東得安息。」とあり。又『後漢書』德若國の條に「歴蜀〔罽〕賓六十餘日行、至烏弋山離國、地方數千里、時改名排持、復西南馬行百餘日、至條支。」とある文面によりて之を察するに、烏弋山離の疆域には Arachosia 及び Drangiana を包含せしもの如し。烏弋山離の名は從來 Alexandria の音譯にて、その都城は今日の Kandahar なるべしと信ぜられたり。さても烏弋山離國の都が今の Kandahar 或はその附近なるべきには敢へて異論なけれど、此の國名を Alexandria の對音となすに就いては聊か疑惑の存せざるにあらず。Alexander 大王が東洋諸國を征伐せしとき、重要なる地點を選んで其處に都會を興し、之に自己の名を冠せしもの枚舉に違あらず。然るにその名は大王の死後大概湮滅に歸して亦聞えざるに至れり。されば、Arachosia に建設せる Alexandria 城の如きも、Greek 人の此の地を支配せし間は實際その名にて呼ばれたらんも、其の後塞・安息の如き東洋人が之を占領するに及んでもなほ此の名稱は土人の間に行はれたりしか否か、甚だ疑問なり。尤も Strabon, Ptolemaeus などの書には此の名を記すといへども、これは Greek の古記録を踏襲せるものなれば、よしや此等の書に Alexandria の名を掲げたりとて、當時此の名稱が維持せられたる證左とは爲し難し。Kandahar の地は Darius 王の碑文に Harauvatiš と記され、Greek, Rome の記録には Arachosia 或は Arachotus と書かれ、その名稱は連綿として Arabia 時代に至るまで持續せられたり。此の如く太古より有名なる Arachosia が、漢代の支那人に Alexandria の名によりて傳はれりとせば、そは甚だ不思議の事にあらずや。また更に之を考ふるに、當時漢人が實際彼の國に至りて Alexandria の名を聞き傳へたらんには、必ず之を阿歴山離とも記すべき筈なり。何となれば l 音は元來漢人の有する發音なればなり。然るに何が故に之を烏弋山離と書き綴りしか、甚だ奇怪の事と謂はざるべからず。想ふに烏弋山離の烏弋は Harauvatiš の Harau、Arachosia の Arach を譯したるものなるべし。漢語には r 音なかりしが故に、rau, rach を音譯するに類似の發音を有する弋 (yok, dok) 字を使用せしならん。また烏弋山離の山離は Drangiana をいへるなるべし。此の地は Darius 王の碑文に Zaranka とあり、Greek 人の間には Saranga, Zarangiana, Drangiana の諸稱にて呼ばれ、その都城を Zarin, Zaring といひ、Iran 語海の義なり。想ふに山離は此の Zarin の對音なるべし。『漢書』の陳湯傳に烏弋山離を山離烏弋と記し、『魏略』には單に之を烏弋とかけり。此等の例を以て之を觀るも烏弋山離が二國の連稱たるを察すべきか。」(345-346 頁)

烏弋山離は Arachosia 地方及び Drangiana 地方の二國の連稱ということのようです。地図の円を付した地域にあたり、左側が Drangiana で右側が Arachosia です。



Strabon の『地誌』には下記の記述があります。

「ドラングアネ地方もカルマニア地方にかけての地域を占め、アリア地方と共通の貢納地だった。この地方は大部分が山脈の南麓にあるが、一部はアリア地方に面した北側地帯に近い地域をも含む。また、アラコシア地方も（アリア地方から）いくらか離れ、これも山脈の南麓地帯にあってインドス河まで伸び、アリア地方の一部である。」(11 卷 10-1。飯尾都人 1994, 68 頁)

この「ドラングアネ地方」と「アラコシア地方」が、白鳥の Drangiana 地方と Arachosia 地方であるならば、白鳥が言う旧 Alexandria と Strabon の言うアリア地方の Alexandria は異なる場所ということになります。

中村：Strabon や Chavannes の言う Alexandria と白鳥氏が言う旧 Alexandria は、場所が異なるとしたら、たとえ白鳥氏が指摘するように地域の名称が Alexandria から他のものになっても、Strabon や Chavannes の Alexandria とは関わりがないことです。

吉池：そうですね。『漢書』西域伝の烏弋山離国の条項に、この国を王が治めているという記述があります。余太山(1991)はこの記述および「山離」を単独で使用する例がないことより、王は一人であり、烏弋山離も一国であることは論を待たないと思います¹¹。なお、烏弋山離の場所については、この論文によると説は四つあるとのこと。

中村：烏弋山離がどこにあったか、日本の邪馬台国論争を思い起こさせますね。いずれに

¹¹ 余太山(1991)「安息與烏弋山離考」『敦煌學輯刊』1991 年第 2 期, 82-90 頁。「《漢書・西域傳》稱：烏弋山離國，王〔治〕去長安萬二千二百里。不屬都護，戸口勝兵〔多〕，大國也。東北至都護治所六十日行。

即然“王治”只有一人，“烏弋山離”只是一國，自不待言。又，文獻不見“山離”單舉，亦可知“烏弋”不過是“烏弋山離”的略稱。」(84 頁)

しても、烏弋山離という比較的長い音訳が、一つの連続した音訳名であるならば、Alexandria 以外には考えにくいということなのでしょう。われわれも、その線に沿って、議論を進めるといっていかかでしょう。もっとも白鳥説の中の音に関する指摘には興味深いものがあります。

吉池：烏弋山離が、もしも Alexandria の音訳であるならば、烏弋山離ではなく阿歴山離とするはずだという、弋と歴の部分ですね。たしかに、歴が/liek/¹²のような音であったならば、これがふさわしく、わざわざ弋を使う必要はないということになります。

中村：その点もふくめて、烏弋山離とアレクサンドリア Alexandria について、音の対応を検討しましょう。

吉池：検討に入るまえに烏弋山離という音訳語の歴史の中での位置を確認させてください。



西周よりほぼ長安と洛陽が交替して首都となっており、烏弋山離は長安が首都であった前漢の音訳と考えていいのでしょうか。もっとも『漢書』の成書は後漢ですので下限は後漢ですが。

中村：烏は中古音という模韻の字です。吳音ではウであり、漢音ではオです。これが Alexandria の語頭の/a/に対応するわけですから歌戈魚虞模古読論争に関わる音訳語ということになります。

そして、弋は喻母4等の字で、吳音がイキ、漢音がヨクです。これが Alexandria の第2音節/lek/に対応しているのは何故かが問題になります。白鳥氏の例を借りれば、どうして「歴」ではなく「弋」を用いるのかということですね。

¹² Karlgren の上古音。Karlgrén, B. (1957) *Grammata Serica Recensa*. Stockholm: The Museum of Far Eastern Antiquities. 1987 年のリプリント版による。

まずは、この「烏」と「弋」を出発点として上古音にアプローチしましょう。詩経の押韻や声符についても必要があれば検討しましょうか。